

## 《研究ノート》

## 性格心理学の受講者における「人格」と「性格」のイメージ

生 駒 忍

Psychological images for “personality” and “character” in the class of personality psychology

SHINOBU IKOMA

キーワード

SD法 (semantic differential method), 主観評価 (subjective evaluation), パーソナリティ (personality)

人間の個人差のうち、心理学が扱う話題で、知的能力自体には属しない領域に対しては、「性格」、「人格」、「パーソナリティ」といった表現がなじんでいる。どちらかと言えば「パーソナリティー」と表記されることの多い、ラジオ放送などで番組の顔となる司会者を指す用法は明らかに別義であるため除くと、その3種のうちで、一般に最もよく見かけるものは「性格」であろう。今日では、人間以外の特徴を表す日常語としても定着している（渡邊, 2013）。また、日本心理学諸学会連合が認定する心理学の基礎資格である心理学検定では、全10科目のひとつとして「社会・性格・感情」が置かれている。一方で、日本性格心理学会が2014（平成26）年に日本パーソナリティ心理学会へと改称し、村上（2011）のようにこの改称に好意的でない立場もあったものの、近年では「パーソナリティ」が好まれる傾向が強まっていた。「人格」は「パーソナリティ」と同義とされたり、無批判にpersonalityの訳語として扱われたりするが、渡邊（2013）によれば心理学では「性格」に比べて使用頻度が落ち、カタカナの「パーソナリティ」がほとんどとなったという。ただし、日本心理学会は賛助会員を除く会員を5群の専門区分のいずれかに配して登録しているが、第Ⅲ部門は「臨床 人格 犯罪 矯正」

である。

今日のが国の心理学においては、「人格」には非好意的ないしは回避的な態度が取られることも少なくない。心理学のテキストや入門書では、価値的な意味合いを含むことや訳語としての混乱などから、好ましくないとされることも多い（例えば、北岡, 2005; 岡田, 2016; 杉山・松田, 2016）。伊坂（2017）は、「パーソナリティ」のほうを積極的に採らせる態度は示さないものの、「人格」が誤解を招くことに言及し、池上（2016）は心理学用語と日常語としての「人格」の区別への留意を求めている。事典である中里（2002）では、章題として「人格心理学・発達心理学」が置かれながら、その中の各節ではもっぱら「性格」が用いられている。青木・水國・木附（2018）は、章題で「人格・性格・アセスメント」というやや奇異な並列表記を行いつつも、その章の文中では「性格」のみを用いている。ただしこれは、収載している青木（2018）全体に散見される校正漏れや、刊行時期からみて、公認心理師カリキュラムの登場を見て章題にのみ「人格」を追記したことの結果である可能性も考えられる。

公認心理師カリキュラムは、こういった用語の動向を大きく変える可能性がある。カリキュラムでは、「大学における必要な科目」として

「感情・人格心理学」を置き、そこに含まれる事項にも「人格の概念及び形成過程」や「人格の類型、特性等」と示しており、心理学界において「人格」が公式な表現として格上げされることとなったといえる。『公認心理師現任者講習会テキスト』（一般財団法人日本心理研修センター、2018）は、そこでpersonalityを「人格」と表記する理由を脚注<sup>1)</sup>で示している。これから、各大学でカリキュラムのものと一致する科目名への変更や新規開講が相次ぐことや、そこで用いるためのテキストへも反映されることは明らかである。そして、テキスト類が書店にも並び、「感情・人格心理学」を学んだ人材が社会に出ていくにつれて、「人格」が広く定着し、イメージも変容していく可能性も考えられる。

そこで本研究では、「人格」と「性格」とのイメージについて、大学生を対象とした質問紙調査を実施し、現状の把握を行う。「性格」が日常語としてよく定着し、心理学でも今なお広く用いられている一方で、避けられる傾向が続いてきた「人格」は、公認心理師カリキュラムを受けてこれから反転を見せることになると考えられ、今が底となる可能性が高い。この時点での2語のイメージを把握しておくことは、公式には「人格」を用いることになる大学等の授業においての、当面の語法を考える一助となるだろう。また、将来的に見込まれる用語イメージの変容をとらえる際には、そこでの比較対象として、底をついた時点での知見として活用できるものと考えられる。

## 方 法

**調査対象者** 流通経済大学において「性格心理学」を履修している大学生31名（男性22名・女

性9名；平均年齢20.2歳）が質問紙調査に回答した。これは必修科目ではないため、「人格」や「性格」に一定以上の関心がある学生が主であると考えられる。また、前年から続けての履修である者はおらず、したがって科目内容自体に対してはほぼ初学者であるとみてよい。

**調査時期** 2018年4月に調査を実施した。半期で開講される「性格心理学」の第2講の終了後に質問紙を配布し、回答を求めた。

**質問紙** SD法によるイメージ測定を行った。まず「人格」ということばに対して持っているイメージを、左右に書かれたことばを見比べて、どちらにどの程度近いかを考えていただき、1～7のいずれかに丸をつけて回答してください。次に「性格」ということばに対して持っているイメージを（以下同様）として、22対の形容詞または形容動詞の対をそれぞれに対して提示し、回答を求めた。項目は、学生相談に関するイメージを検討した櫻井・有田（1994）のものを用いた。同一の語対は、カウンセリングのイメージとその変容を検討した生駒（2015）でも用いられている。

## 結 果

SD法による評定値の平均を「人格」「性格」それぞれについて求めたところ、表1のようになった。数値が小さいほど、語対の左側へのイメージが強いことを示す。全体的には4前後の値をとったものが多いが、「真面目な－不真面目な」において真面目な方向への、「非人間的な－人間的な」で人間的な方向への偏りが目立っていることがうかがえる。

2語の間での差について、語対ごとに対応のあるt検定を行ったところ、「ていねいな－粗雑な」において有意傾向が認められ（ $t(29) = 1.87, p = .072$ ）、「人格」のほうがより粗雑、「性格」のほうがよりていねいなイメージがある可能性が示唆された。それ以外の語対において、有意な差は認められなかった。

1) 『公認心理師現任者講習会テキスト』は、末尾に執筆者一覧を掲載し、章ごとに50音順で列挙してはいるものの、節レベルでの執筆分担は非公開とする方針を採っているため、この箇所の執筆者は不詳である。

表1 大学生によるSD法評定平均

	人格	性格
思いやりのある－自分勝手な	3.45	3.61
動的な－静的な	3.94	3.81
良心的な－偽善的な	3.06	3.45
派手な－地味な	4.10	3.61
ていねいな－粗雑な+	3.77	3.06
心理的な－身体的な	3.00	2.55
献身的な－利己的な	3.90	3.81
真面目な－不真面目な	2.94	2.90
不信な－信頼できる	4.74	4.55
内面的な－外面的な	3.03	3.29
暖かい－冷たい	3.26	3.10
明るい－暗い	3.65	3.35
安心な－不安な	3.26	3.19
落ち着いた－落ち着きのない	3.16	3.19
非人間的な－人間的な	5.32	5.26
秘密の－公然の	3.68	4.10
不親切な－親切な	4.94	4.68
深刻な－気楽な	4.23	4.58
頼もしい－頼りない	2.90	3.19
閉鎖的な－開放的な	4.06	4.13
厳しい－優しい	4.00	4.65
激しい－穏やかな	4.13	4.48

+ $p < .10$

## 考 察

本研究では、性格心理学を履修している大学生を対象として、SD法による「人格」ならびに「性格」のイメージ調査を行った。得られた評定値からは、人格と性格との間にそれほど大きな差があることはうかがえなかった。その中で、「ていねいな－粗雑な」では有意傾向が得られていた。「人格」がより粗雑であるというイメージがあるとするならそれは何に起因しているのか、そして公認心理師カリキュラムからの影響が生じてきた際にはこのイメージにも変容が及ぶのかどうか、今後検討されてよい課題であろう。

2語とも、「真面目な－不真面目な」と「非

人間的な－人間的な」で目立った偏りが見られた。これらは比較的理解しやすい傾向であろう。ただし、ここで扱われた「非人間的な」が、人間的な理性の対極としての獣性なのか、それとも人間的な温かさへの対極としての冷たさなのかははっきりしない。異なる語対を用いてのさらなる検討において検証されることが望まれよう。

本研究の知見は、公認心理師の第1回試験の半年前における大学生のイメージを示したものである。今後、公認心理師カリキュラム導入の効果や長期的な社会的影響がどのように現れてくるかを追う上で、今回の知見は特定の大学のみで得られて、大きなサンプルとも言いにくいものであるという限界はあるものの、基礎的な材料として活用できるものと考えられる。

## 引用文献

- 青木智子（編）（2018）.『医療と健康のための心理学』北樹出版
- 青木智子・水國照充・木附千晶（2018）.「人格・性格・アセスメント」青木智子（編）『医療と健康のための心理学』北樹出版 pp.79-101.
- 池上知子（2016）.「社会・感情・性格」子安増生（編）『アカデミックナビ心理学』勁草書房 pp.131-168.
- 生駒忍（2015）.「学部での履修前後における「カウンセリング」のイメージ変容－「癒やし」から現実へ－」『目白大学高等教育研究』, 21, 149-152.
- 一般財団法人日本心理研修センター（編）（2018）.『公認心理師現任者講習会テキスト2018年版』金剛出版
- 伊坂裕子（2017）.「性格」和田万紀（編）『心理学第3版』弘文堂
- 上里一郎（監修）（2002）.『臨床心理学と心理学を学ぶ人のための心理学基礎事典』至文堂
- 北岡明佳（2005）.『現代を読み解く心理学』丸善
- 村上宣寛（2011）.『性格のパワー』日経BP社
- 岡田和久（2016）.「「パーソナリティ」という考えかたを考える」宮本聡介・伊藤拓（編）『高校生に知ってほしい心理学』学文社 pp.65-72.
- 櫻井信也・有田モト子（1994）.「SD法による学生相談センターに関するイメージの測定」『学生相談研究』, 15, 10-17.
- 杉山憲司・松田英子（2016）.『パーソナリティ心理学 自己の探究と人間性の理解』培風館
- 渡邊芳之（2013）.「パーソナリティ概念と人か状況か

論争」二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・  
藤田主一・小塩真司・渡邊芳之（編）『パーソナリ  
ティ心理学ハンドブック』福村出版 pp.36-42.